

# 風の詩

## 田んぼの記憶

赤とんぼが群れる田んぼから、  
秋の風が藁の匂いを運んできます。  
それは何とも言えない懐かしい匂いです。  
少し前までは、履き物や土壁など  
生活の中で欠かすことのできなかつた藁が、  
稲刈りと同時に田んぼに返されてゆくのは、  
少しもつたないような気がするのですが、  
それでも次の年のお米の養分となって、  
ちゃんと命をつないでゆきます。  
今、目の前に広がるこの田んぼは、  
何十年か、何百年か  
その上で汗を流してきた人たちや、  
土の中で循環してきたたくさんの方の命を記憶していて、  
何かとても大切なことを  
伝えてくれている気がするのです。

## 風の詩に耳をすませて

私は二歳になったばかりの息子と  
毎日のように田舎道を散歩します。  
それは大人の散歩とは  
速度も視線もちよつと違います。  
例えば、あちこちにあるお地藏さんの前で  
必ず立ち止まり、手を合わせます。  
そして、ドングリやら葉っぱやら小石やら  
彼なりのお供えものを使います。  
そして、ありんこの列を見守りつづけたり、  
風にゆれる葉っぱに手を振ったり、  
みどりの田んぼに舞い降りる白サギの群に  
大きな声で呼びかけたりします。  
そんな息子をそばで見ていると、  
風や土や草やこの土地の神さんと  
まるで友達のように  
少し羨ましく思えるのです。  
そんなふうな風景とつながる時間をとり戻したくて  
私は描くのかもしれません。



秋風 (高島)

絵文 北村美佳